◉韓国政府は12名の留学生らを全員即時釈放せよ！
◉日本政府は12名の留学生らの人権回復に努力せよ！

11.22通信

1981年 7月24日
第31号
1部100円＋カンパ
年8回発行
振替口座
大阪4649・摂津富田教会

編集・発行所
「11・22在日韓国人留学生・青年不当逮捕者を救援する会」
大阪府高槻市富田町3−7−25
摂津富田教会（〒569）
電話 0726−96−2562

救援に一層の奮起を！

第二期総行動成功へ

めぐりめぐって六度目の暑い夏がやってきた。そして、8・15も目前に迫ってきた。死刑執行阻止第二期総行動は近く収束するが、この成果を、「執行阻止」「即時釈放」に必ず繋げなければならない。

しかし、日韓両為政者の好都合な思惑も進行している。八月には外相会議、九月は定期閣僚会議、そして十一月は首脳会談が予定されている。新たな日韓枢軸再編の一連の動向が、「政治犯」の現状に暗影を投げかけることは必至だ。さらにその一方で、「孫裕炯事件」示されるように、醜悪な治安機構のゆ着も指摘されよう。われわれは、突きつけられた新たな課題にこん身の力で取り組まねばならない。

救援運動の前途にもいまや熱波が吹き荒れているのだ。

秋期攻勢に弾み

5.30、韓国大使館デモ

三月から始められた死刑執行阻止第二期全国総行動は、現在七月末の最終集約に向けて最後の取り組みが、全国各地で懸命に続けられている。

政治犯救援運動の本年上半期最大の行動は、予想以上の多大な成果を収め、死刑阻止の世論構築という所期の目的はほぼ達せられたといえよう。

「全国会議」「11・22救援会」これに「家族僑胞の会」の三者は、関東、関西を中心に集約作業を続けているが、さきに提出した中間集約分も含め最終的な署名数は十万人前後になる見込み。

総行動の初期の段階では、遅々として仲々署名数が伸びなかったが、五月に入り、北海道から沖縄までの総評傘下の組合などに徐々に浸透し出し、飛躍的に伸びた。また、各地の市民運動体や支援団体からも署名用紙の発送を望む声が相次ぐなど、救援会では嬉しい悲鳴をあげていた。

第二期総行動の署名集約を受けて、関西では来る七月二十九日、午後六時から東区の労金会館（森の宮下車）で、東京では、翌三〇日、午後六時から全逓会館ホールで、各々集約集会を行う予定。

なお、政府への署名提出時期は「議員懇談会」を通じて現在調整中だが、八月初旬の予定。

またこの署名のマイクロフィルムは、第六次国連派遣の一環として、八月末に、「僑胞の会」事務局長の金泰明氏がジュネーブの国連人権委員会に提出する。

◇　◇

第二期総行動の中間集約として、去る五月二十七日に関西、関東で同時集会が持たれた。

関西では、東区のピロティーホールで、約八〇〇人が集まった。

集会では、「11・22事件」で懲役四年の判決を受け、昨年帰日した金東輝氏(27)が、「下半身を裸にして殴打されるなどの屈辱的拷問を受けた」と非道な取調べを告発、また「獄に残された友人のため、私も先頭に立って救援運動を闘い抜く」と力強く決意を語り、参加者の万雷の拍手を浴びた。

次に、僑胞の会メンバーによる構成劇「祖国をおもう」が上演された。この劇は、昨年亡くなれた徐兄弟のオモニ呉己順さんの苦闘を取り上げたもので、参席者は深い感銘を受けた。

東京では、豊島区の豊島公会堂で六〇〇人の市民や労働者らが結集した。

また三〇日には、関西からの五〇人を含む三〇〇人が、対韓国大使館行動に結集した。港区の桧町公園で集会を開いた後、一行はデモに出発、大使館前では立ち止り、シュプレヒコールを繰り返し叩きつけた。

内政干渉の壁破れず
5・29—対政府交渉

五月二十九日、全国の救援関係者や政治犯家族らも参加した対日本政府交渉が行われた。

まず外務省では、木内アジア局長が応待した。

交渉は、五氏の手錠を外すこと、等の九項目の事前に提出済みの「申し入れ事項」に答える形で進められた。しかし、回答は総じて不十分、不誠実なもので、従来から主張している"内政干渉"を楯に、逃げの姿勢に終始した。

その中でも注目されるのは、日韓外相会議には日本側から申し入れること、及び減刑、釈放等についても「人道的見地」から継続して申し入れて行きたい、と述べたことであろう。

この交渉には、救援会から十二氏の他、康宰玉さん（姜宇奎氏夫人）、金永愛さん（康宗憲氏の母）の二人、これに佐藤誼、米田東吾の両議員が出席した。

法務省では、①家族国連派遣の際に入管局長証明の発給、②帰日政治犯の原状回復、の二点をめぐって行われた。

法務省の伊藤審議官は、①に関しては、外務省と協議するので、いま即答できない、と述べた。また、②は現在検討中であるが、前向きに善処したい、と回答してきた。

この交渉では、救援会七氏、家族二氏、議員二氏が参加した。

孫裕炯事件
デッチ上げを糾弾！

在日韓国人を巻き込んだ新たな「スパイ事件」がまたしてもデッチ上げられたが、拘束者家族らの要請を受けた関西の救援関係者は、早期釈放をめざしいち早く救援に起ち上がっている。

去る六月九日、韓国国家安全企画部（KNSP、旧KCIA）は、孫裕炯氏（52）＝ソン・ユヒョン、大阪市生野区＝を主犯とする六人を「北朝鮮スパイ」として検挙、十人を捜査中と発表した。発表によると、立件された六人の中には孫氏の妻夫辛花さん（50）＝プ・シンファ＝と長男 孫明源氏（27）＝ソン・ミョンウォン＝が含まれているが、両氏は日本に居り逮捕されていない。

過去の「11・22事件」同様、韓国内における「スパイ事件」発表は、国内の治安情勢が著しく悪化した時期に集中している。今回も四月から全国各地で波状的に繰返されている学園デモ等を鎮静化させるため、「北の脅威」を意図的に煽りデッチ上げられた可能性が強い。

また、共犯として当局から名指しされた夫辛花、孫明源両氏も、「事件」との関りを強く否定していることからも、この「事件」のデッチ上げぶりがうかがわれる。

家族などの話を総合すると、孫氏は四月二十二日、取引先き銀行の招待ゴルフ・コンペで渡韓し、そして二十五日早朝、宿泊先きのホテルから情報部員により連行された。

一方、夫人の夫辛花さんは二十六日に郷里の済州道へ向かい、同地で孫氏と合流する予定だった。ところが夫人も拘束され、三十日ソウルに連行された。

夫人は、KALホテル七階の一室で監禁中の孫氏と対面した。孫氏は、「北に行った容疑で調べられている」と語り、同席の情報部員が「古いパスポートを持って来い」と夫人を脅迫した。

同日夜、夫人が生野区の自宅に戻るやいなや、黄某と名のる男から電話が入り、区役所横の喫茶店を指定してきた。急いで夫人が赴きパスポートを手渡したところ、「他言するな」と一喝された。

その後、「五月の連休に釈放する」との言葉を信じ沈黙していたが、一向に釈放される気配がなく、あまつさえ六月九日には「スパイ団事件」の主犯として発表されてしまった。また夫人と長男もいわれなき嫌疑を課されたため、「全く身に覚えがない」と強く反発している。

なお、拘束中と思われる他の三人の韓国人及び捜査中の十人は、いずれも孫氏の親族である。

◇　◇

ソウル拘置所に在監している孫氏（収監番号一五〇番）に、七月中旬、担当弁護士の太倫基氏が面会した。太弁護士の話によると、孫氏は、「汗を全くかかないので、毛布をかぶって寝ている」と身体の不調を訴えていた。また救援会員の差し入れや、家族の手紙は受け取っているとのこと。

なお、裁判開始は八月下旬から九月初旬頃になる見込み。

（2面に関連記事）

救援会結成へ
近弁連に提訴も

事件発表後、救援会は生野区在住の孫さんの家族と直ちに接触を開始した。

残された家族も夫人と長男が関連者として名前を挙げられているので、直接韓国へ渡り、裁判傍聴や差し入れが不可能なため、裁判対策も含めて最善の救援活動を行わねばならない。

現在、生野区内の孫さんの友人知人、労働者、韓国人などを中心に「孫さんを支援する会」が近く発足の見込みで、着々と準備が進められている。同会では、抗議葉書き、大衆署名、地域情宣を行うほか、カンパも募り、裁判費用や差し入れに充てる予定。

◇　◇

六月二十九日、大阪北区のPLP会館で、「11・22救援会」「家族僑胞の会」は合同で記者会見を持ち、「不当な事件デッチ上げを許さず、孫さん釈放に向け全力を尽す」との抗議声明を発表した。

同会見に出席した夫人の夫辛花さんは、「主人が捕らわれて、家族は一日として休まることがありません。皆さんのお力で、一日も早く釈放されるようにお願いします」と訴えた。

また「11・22救援会」の桑原事務局長は、「事件の全容が明らかになり次第、近弁連の人権擁護委員会に正式提訴したい」と今後の方針を打ち出した。

左から長男の孫明源氏、夫人の夫辛花さん
桑原事務局長。（6月29日、PLP会館の記者会見にて）

渡韓カンパを

在日韓国人「政治犯」救援運動は、新たなデッチ上げ事件が発表されるなど、依然として困難な度合いを深めております。

さて、「11・22救援会」では、今夏も渡韓団を編成し、獄中の友人に下着や書籍などを中心に差し入れを行う予定です。

つきましては、言いにくいのですが、皆さまに夏期一時金カンパを切にお願いするものです。暑熱に苦しむ友人に支援を！

（送り先き、郵便振替 大阪 4649 摂津富田教会）

集会案内

▼「韓国の獄中医療と政治犯救援運動」
▼八月四日、午後六時
▼大阪国労会館（環状線天満駅下車）
▼主催：李哲さんを救う大阪の会
（獄中医療の実態をパネルディスカッションする）

断鎖

救援会の二人の若い友人のことを紹介したい★A君の"奇癖"に気付いたのはつい最近である。たまたま彼と同じ終電車に乗り合わせた。A君は、カバンからナイロン袋を取り出し、車輌から車輌へと移動し始めた。程なく戻ってきた彼は「今日は収獲なし」と呟いた。不思議がる私が、彼の口から聞き出した仔細は次の通りだ★以前、やはり終電車で一人の酔払いが、辺りかまわずゲロゲロ嘔吐していた。お馴染みの光景だが、回りは知らんふりだ。ところが、健気にも一人の婦人が進み出て、その酔払いの背中をさすり、吐瀉物を新聞紙で覆うなど懸命に介抱した。この光景に、A君は胸の奥深い所から突きあげてくるほのぼのとした情感に満たされた。以来、A君は酔払い介護に精を出し、その恩恵に与ったものは数えきれないという。彼は、その行為を単なる慈善や自己満足でなく、社会変革の一環であると大真面目に主張している。即ち、最初に抱いたあの感情が全ての人に芽生えるなら、この殺伐とした人間社会も少しは変わるのではと信じている★B君は今春、児童むけのある出版社に就職した。会社で読者の投稿を整理していた処、上司が覗き見て一枚の葉書を取りあげ、「この住所は部落だ。売れんから返事は出すな」と告げた。B君は怒った。新入社員であることも忘れ、猛然と怒り喰いさがった。上司も頑として非を認めようとしないため、彼は翌日辞表を叩きつけた★旧約聖書の創世記に、神が悪行に満ちたソドムの町を滅ぼそうとするくだりがある。この計画を知ったある人が、神に、もしその町に十人の正しい人がいても共に滅ぼすのか、と問うた。神は、その十人のため滅ぼさないことを明言した★この世界は、ソドムのようにおどろおどろしている。米ソの核爆弾は全人類を三〇回殺戮できるという。しかし、百鬼夜行のこの地球が依然として消滅していないのは、少ないが"正しい人"が在在しているからではあるまいか。そして、かかる心優しい一群に担われた救援運動の前途は明るい。

日本警察 不当な家宅捜索！

救援会―孫さん支援へ

孫裕炯氏

孫裕炯さん釈放に向けて、救援会、地域の労働者、市民、それに家族等の間で、連日精力的に救援対策が練られているさ中、それらの動きに冷水を浴びせるような事態が起こった。

去る七月十日、宮崎県日向署と大阪府警は、孫裕炯氏経営の会社＝大阪市都島区＝と自宅の二ヵ所を不当に家宅捜索した。

捜索は、六月二十四日に日向署に逮捕された黄成国氏(62)の「密入国」容疑に関連して行われた。警察官二十四名を動員、押収品も八十六点と大がかりな捜索であった。

しかし、被疑事件とは直接関係のない金銭出納帳、預金通帳、住所録、日本、大阪市内地図等が押収されている。

さらに許せないことに、ラジオやステレオ、救援運動関係者の名刺、新聞等の資料類も多数写真撮影されていることだ。

これらの事実は、この捜索が「日本」のささいな被疑事件にかこつけて、「韓国」の〝スパイ事件〟デッチ上げに加担する別件の違法捜索に間違いない。

日韓両国間には、「捜査共助」「犯罪人相互引き渡し」等の協定が存在しないが、両国治安機関がこれまで情報交換や交流を続けてきたのは周知のことである。今回の不当捜索はこの事実を端的に裏付けている。

またこの捜索は、政治犯家族や救援運動に対する露骨な介入と敵視を意味している。

われわれは、今後こうした日本官憲の不当な策動にも全力で対応せねばならない。

◇　◇

「孫氏宅へ、違法捜索される」の一報に、「11・22救援会」は、各個別救援会や支援団体に緊急態勢を取るよう発した。

家宅捜索の翌七月十一日に、桑原事務局長らは生野署に抗議の申し入れを行った。十二日には国鉄桃谷駅で、会員ら五〇名がビラ入れなどの情宣を行った。

また十三日には、『違法収集された証拠物件が韓国法廷に恣意的に提供される惧れがある。押収品と写真撮影のネガフィルムを全面返還されたし』との「準抗告申立書」を大阪地裁に提出した。

この後、救援会、家族、弁護士の三者は、同裁判所内の司法記者クラブで記者会見を持った。

この会見で、二男の孫明弘(22)氏が、「伝えられる黄成国氏は、節油剤販売の客で、昨秋、一～二度会社に訪ねてきただけだ」と強調し、押収品の中に会社の書類が多数含まれているため、「早く返してくれなければ、会社が維持できない」と訴えた。

許慶子さん死去

救援集会などで必ず歌われる「再会」の作曲者許慶子（ホ・キョンジャ）さんが、去る六月三十日、大阪市内の病院にて心不全により逝去された。享年二十九才。

葬儀は、翌七月一日、大阪府池田市の自宅で救援関係者ら多数が見守る中、しめやかに営まれた。

遺族は夫の柳俊男氏（32）と長男柳敬洙ちゃん（2）の二人。

許慶子さんは、「11・22事件」で逮捕され、その後無罪釈放された許景朝氏（37）の実妹で、事件発表後兄の無実を訴え、いち早く救援運動に参加された。そしてここ数年は、専門のピアノを生かし、政治犯釈放を願う数々の作品を発表されていた。代表作は、前記の「再会」をはじめ、「叫び」「生日」それにピアノソナタ「弾圧」などがある。

許慶子さんのご冥福を心より祈念申しあげます。

韓国の被弾圧者にカンパを！

韓国では、全斗煥政権下、多くの民主的人士や学生が投獄され、残された家族も職場や学園を追放されるなど、その現況は悲惨の極限に達しています。

この度、光州事態を含む韓国の被弾圧者に〝カンパ〟を送る運動を、日本キリスト教団日韓連帯特別委員会が呼びかけ、「11・22救援会」もその趣旨に賛同して、全面的に支援することになりました。塗炭の苦しみに喘ぐ彼らにぜひ支援を！

（一年分、二四〇〇円。郵便振替、**大阪5－37971**、**光州支援委員会**あるいは、大阪市大正区南恩加島一－七－二〇、田村みや子気付）

大阪連― 学習会開く

「11・22救援大阪連絡会」では、新規会員の獲得と個別救援会のない政治犯の救援を目的とした活動に取り組んでいる。

結成五年を迎える同会では、メンバーがほぼ固定しているため、現在月一回程度の学習会を積み重ねて、何とか新規会員が一人でも多く参加してくれるよう募っている。そして、関西出身でありながら個別救援会がなく救援が著しく遅れている、具末謨(45)＝懲役十五年＝、鄭勝淵（38）＝懲役十五年＝、李秀熙（29）＝懲役七年＝三氏への、いわば救援の空白部分を埋めるのを当面の目的としている。

次回の学習会は、渡韓報告を中心として、九月六日午後一時から部落解放センター（環状線芦原橋下車）にて。

柳英数氏― 光州に再移監

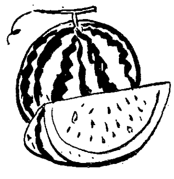
馬山矯導所で結核性肋膜炎の治療を受けていた柳英数氏（32）＝無期懲役＝が、去る六月四日、治癒したと見なされ光州矯導所へ移監されたことが判明した。

このほど光州から家族に宛てた手紙も届き、比較的元気そうな文面に関係者は胸をなでおろしている。しかし、体力の回復も未だ充分でないため、本人は事務的な軽労働につけるよう矯導所当局へ申し入れているという。

新しい収監番号は二六六三番。

盛夏、獄の友を想う

＝李東石＝



「ただいま」と玄関の戸を開け、ミニ自転車を入れる。

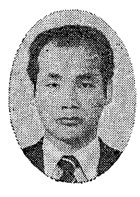
毎夜、家族が寝静まった頃、こっそりと玄関の戸を開け帰宅するのが習慣になってしまった。日曜日ぐらいは早く帰りオモニと話をしようと思うのだが、今日もすでに九時を回っていた。家族そろって食事もできないと、オモニはボヤいていたが、台所で私に夕食の準備をしてくれていた。

冷蔵庫を開けると、きれいに熟れた西瓜があった。「今年、初めて買ってきてん」とオモニが言う。半分だけの玉だが、まだ誰も食べず冷蔵庫に入ったままで、私の帰るのを待っていたそうだ。

歩くだけで汗ばむようになった頃から、通りすがりの果物店や、スーパーの店先で、涼やかな西瓜を見かける度に、思い出すことがあった。

一九七六年の夏、ソウル拘置所で、「11・22事件」第二次逮捕者の一人として裁判中であった私は、一次逮捕者の二審の結果を待っていた。予想外の重刑で一審を終えた私達は、二審に向けて、不安と好転するかも知れないという、かすかな期待が入り混った複雑な心境であった。

七月に入り、救援会の人が渡韓される回数が増えたのか、差し入れが度々届き、私達を激励してくれた。見知らぬ人から差し入れが届いた時には、拘束者同士で確認し合って喜び、それが私達の間では、お互いに激励の合言葉のようになっていた。



ソウル拘置所では夏場に入ってから、アイスクリームや冷麺等の冷感を誘うものが購買品として現われていたが、西瓜だけは運搬が不便だという理由で「差し入れ」だけに限られていた。私は、アイスクリームや冷麺は一、二度食べた。しかしとくに好物というわけではないが、夏の果物の代表のような西瓜を口にできない一抹の淋しさに、いまさらながら囚われの身を感じた。いわば、西瓜を介在させることによって、季節の移ろいや家族や友人達の属している〝外〟とのつながりを感応し触れえてみたかったのではあるまいか。

八月も末、夏も終わりに近づいた頃、ある日本の方から差し入れが届いた。卵、パン、トマトなどと共に小ぶりの西瓜が二つあった。私は嬉しさのあまり、房の中で転がしたり放り上げてみたりして遊んだ。西瓜はバケツの中のなまぬるい水につけられ、包丁の代りに箸でひき裂いて食べた。熟れ足らず味のない西瓜ではあったが、私はその時の感激を忘れられない。

大田矯導所でも夏、時々西瓜を売ることがあった。しかし、私達在日韓国人政治犯は西瓜を買わなかった。ソウル拘置所で私が西瓜に託した感情は、皆共通していたにもかかわらず、一様に買わなかった理由は、やはり西瓜は〝贅沢品〟であるということだ。栄養価と値段、それに西瓜一個で卵やトマトが何個買えるか計算する。

領置金として私達の手元に届くお金は、家族が、経済的、精神的に苦しい状況の中から送ってくれるものであり、数多くの人々からのカンパによるものだと思うと、そう簡単には〝西瓜〟を注文する気になれなかった。そして、もう一つ大きな理由があった。

特別舎には、在日韓国人を除くと一日一個の卵も買えない悲惨な状況に置かれている政治犯が少なくなかった。私達がいくら物を買っても、壁でへだてられた彼らの口に届くわけがないのはよく分かっているのだが、彼らのことを考えると、気安く何でも買うことができないのである。

いま私は、この日本で何でも食べ、何でも出来るようになった。しかしこの灼熱の中、氷のかけらさえ見ることが叶わず、水さえも充分に使えない過酷な状況のもとで闘っている政治犯のことが、何かにつけすぐ頭に浮かぶ。ことに無名の支援の届かない数多くの政治犯の存在は、私の心を疼（うず）かせる。

私はよくこんな情景を想像する。よく冷えた西瓜をひっきりなしにほうばり、満座の友人らが笑いながら昔の苦労話に打ち興じているさまを。

夢ではなくその日の到来が一日も早からんことを祈りたい。そして、私も全ての政治犯が釈放されるその日を引き寄せるため、皆さまと共に闘いたい。

《李東石（イー・ドンソク）》一九五二年、兵庫県にて出生。二十九才。一九七一年、大阪府立布施高校を卒業。同年四月、ソウル大在外国民研究所に入学。七三年、ソウル市の韓国外国語大フランス語科に入学。三年生の七五年十一月末、「11・22事件」の第二次逮捕者六人の一人として、CIC（陸軍保安司令部）に連行される。「反共法」「国家保安法」等で起訴され、七六年五月の第一審では懲役八年が判決された。第二審では五年に減刑され、同年十二月二十八日確定。翌七七年一月七日、大田矯導所に下獄した。そして、八〇年八月十五日、刑期を四カ月余り残し仮釈放された。本年三月十七日、逮捕以来六年ぶりで東大阪市の自宅に戻った。

大田矯導所

不明の政治犯 黄氏 既に釈放

逮捕以来、その消息が皆目分からなかった一人の在日韓国人政治犯が、このほど救援会の調査で既に釈放されていることが判明した。

この人は黄龍順氏（62）＝京都市南区＝で、七六年六月に治安機関に拘束され、第一審では懲役十年が言い渡されていた。しかしこの直後から情報が入らず、救援会では昨年頃から探索していたが、今年五月、光州矯導所で懲役五年の刑期で服役していることが判り、初の差し入れを行った。

日本国内でも継続調査していたが、先頃、黄氏は六月十七日、刑期満了で釈放されているという事実が明らかとなった。

東京都板橋区在住の家族や京都の友人に、国際電話や郵便で、黄氏自ら連絡してきている。

黄氏の健康はほぼ良好で、ソウル市の実弟宅に身を寄せながら帰日手続きを進めているが、許可が出るのは約半年後の見込み。

なお、高齢であり刑期も短い割に中途で仮釈放されず満期出所となったのは、救援の動きが全くなかったからではと関係者は推測している。

黄氏への主な容疑は、誤って軍事施設を写真撮影したというもの。

新たな死刑囚

不明政治犯判明

このほど、渡韓した救援関係者の調査によって、新たに本国人の死刑囚一人と、何人かの在日韓国人と思われる政治犯の収監先等が判明した。

金常会氏（58）＝キム・サンヘ、死刑確定。ソウル拘置所に在監しており一八〇番。現在のところ確認されている十人目の死刑囚。七六年六月頃、子息金テイル氏(28)＝懲役七年、大田矯導所＝ら一家親族と共に逮捕された。事件内容は調査中。

金宇哲氏（30）＝キム・ウチョル、懲役12年。光州矯導所、二〇〇三番。在日韓国人政治犯だが、逮捕年・事件内容・出身地等は不明。精神的に不安定な状態にあるとの話も伝わっている。

朴良采氏（65）＝パク・リャンチェ、懲役12年。光州矯導所、一五七一番。大阪出身で工務店を経営していた。娘が千葉大学理学部に在籍中とのこと。矯導所は彼を在日韓国人とは認知していない。

梁会善氏（43）＝ヤン・ヘソン、無期懲役。大田矯導所在監、三五五二番。七三年八月逮捕される。早稲田大学理工学部出身で、実兄が東京に在住している。現在、早稲田出身の同窓生を中心に救援会発足にむけて取り組まれている。

救援短信

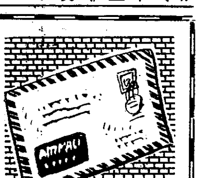
◎本通信28号の「断鎖」で、『〝三千里〟には政治犯問題が採り上げられたことがない』は事実誤認で、この箇所は削除します。

◎八月二十九日午後四時から翌三〇日午後四時まで、大津市の三井寺で、恒例の「個別救援会合宿」が開かれます。参加費は二食付きで四千円ほど。遠方の方の参加も歓迎します。

◎夏は暑いと相場が決まっていますが、獄中の青年の痛苦はいかばかりでしょう。八月中旬頃には渡韓団を派遣するのでカンパを！

ソウル便り

弟へ…



孝もとうとう高校生となりましたか！はやいものですね。兄ちゃんが最後に日本を発った時、確か孝はまだ小学校の四年生でした。その後二度ここで君の成長した様子に接することができましたが、兄ちゃんのまぶたにはいつも幼なかったころの甘えたな孝の姿が焼きついていて、どうも実感が湧きません。

孝が必死に勉強して、優秀な成績で一流会社に入ろうと頑張っているのだという覚悟に、兄ちゃんは、頼もしさと同時に一抹の物足りなさをも感じています。高校生活というのは、じめじめとした灰色であってはなりません。明るく華やかなバラ色でありたいし、時には真っ赤な燃える情熱の色であってほしいと兄ちゃんはいつも思っています。これは決して、適当に楽しんで過ごせということではありません。人間が努力をし全力を出し切るというのは、常に貴いことです。そして目標を立て前進することも大切なことです。しかし、良い成績で一流会社に就職するということが、孝の若さに溢れた力一杯の高校生活の結果であってほしく、それのみが唯一の目標であってほしくない、というのが兄ちゃんの正直な気持ちです。いつも余裕を持って下さい。あらゆることに対する意欲を失くさず、暇さえあれば読書をしなさい。家には兄ちゃんの本がたくさんあるはずです。どうも説教くさくなってすまないね。

最後にもう一言。兄ちゃんの最も言いたいことです。日本で生まれ、日本の学校で教育を受け、日本で一生を送ることになっても、常に祖国のことを忘れないように。民族性の二大要素は、その言語と歴史です。あらゆる機会を利用して、孝自身から奪われた私たちの美しい国語と、混乱に満ちた英雄的な国史を学び、取り返して下さい。そしていつの日か、君と日本語ではなく韓国語で手紙のやりとりをしたいものです。その日には孝も、日付けに「昭和」等という年号を無神経に使ったりしないだろうから。元気でがんばるように！

（一部略）

一九八一年五月二十八日

康宗憲